

東南アジアにおける民族服の研究 (第1報)

タイ国山地民族の生活と衣裳

柴村 恵子 ・ 織田 恵子

Studies on Folk Costumes of Northeast Asia (I)

Lives and Costumes of Hilltribes in Thailand

K. SHIBAMURA and K. ODA

緒 言

タイ国は東南アジア諸国の中で、他の民族の支配を受ける事なく、400年に渡る独立国家としての立場を堅持してきた唯一の国である。なお、シャムと呼ばれた時代から朱印船の渡航や、アユタヤ時代の山田長政の活躍など、近世以来我国とは深い交流を有し、日本人にはなじみの深い国である。

また、名古屋女子大学生生活科学研究所は、1972年に東北タイコンケン地方に多発する「農民の栄養性貧血」について、タイ国衛生省栄養部と共同で調査研究を行った。なお、この調査に先立ち予備調査として同国の西北部に住む山地民族についても、名古屋女子大学生生活科学研究所長広正義博士や佐藤正孝教授らが現地へ赴き、各種の資料を得てきている。この地域に住む山地民族で現在明らかにされているものは、メオ族・ヤオ族をはじめ約10数種族と言われている。現在、ラオス、ベトナムなどの国々では激動する国状から歴史の変遷が大きく、すでにその原形をとどめない種族が多い中であって、タイ国の諸種族は衣裳をはじめ風俗・習慣・宗教儀礼・冠婚葬祭などの彼らの伝統的文化がそのままに保たれているが、この点では特異な存在と言えよう。これらの民族についての研究は、A. Bernatzik (1947), P. Kunstadter (1967), H. Williams (1952), A. Winnigton (1959), G. Young (1961), 岩田慶治 (1971), 白鳥芳郎 (1978), 梅棹忠夫 (1979) ら各氏によって民族学的報告がなされている。しかし、衣裳面（特に構成やデザイン）から深く追求したものは少ないため、今回はこの点に視点をおいて研究を進めることにした。これらの種族は、その衣裳を見れば容易にその見分けがつくと言われているほど豊かな民族色を持っている。特に女性の衣服や装身具は、それぞれ固有の伝統に基づいてデザインされており興味深いものが多い。しかし、これらの種族の中にも同国平地民族との間に、徐々に交流が進みつつあり、その中に同化する傾向がみられる。そこで私たちは民族衣裳の特色を構成面および意匠面からとらえる事によって、タイ国の生活習慣と衣裳との関係を考察することとした。

本報では、タイ国西北部に住む山地民族の生活域と生活の特色ならびにその衣裳について、現地調査に先立って文献ならびに本大学生生活科学研究所および国立民族学博物館所蔵の資料により解析を行った。その結果を記録にとどめることは意義のあることと考え、その一端を報告する。

研究 方 法

本報では、山地民族の生活とその特徴を最も顕著に具現している民族衣裳について考察するのが主たる目的であるが、そのためにはこの地域に住む種族とその生活域について明らかにする必要がある。

山地民族の分け方や生活域についてはいくつかの意見があり、研究者によって若干の違いがあるが、私たちは次の文献を主体としてこの解析を試みた。

- (1) 岩田慶治(1971)・東南アジアの少数民族
- (2) 梅棹忠夫(1978)・民族探検の旅
- (3) 石井米雄(1979)・世界の民族
- (4) 岩田慶治(1969)・民族地理(下巻)
- (6) 白鳥芳郎(1978)・東南アジア山地民族誌
- (10) G.Young (1969)・The Hill Tribes of Northern Thailand
- (11) エッソ・スタンダード石油(株)(1970) Energy

また、生活や民族衣裳の特色の解明も同様次の文献によった。

- (1) 岩田慶治(1971)・東南アジアの少数民族
- (2) 梅棹忠夫(1978)・民族探検の旅
- (3) 石井米雄(1979)・世界の民族
- (5) 白鳥芳郎(1978)・季刊民族学4
- (6) 白鳥芳郎(1978)・東南アジア山地民族誌
- (7) 講談社編集部(1975)・世界の国・東南アジア I
- (8) 菊地一夫(1979)・ケシをつくる人々
- (9) 飯島茂(1971)・カレン族の社会・文化変容
- (10) G.Young (1969)・The Hill Tribes of Northern Thailand
- (12) 村松一弥(1973)・中国の少数民族

なお、実物による解析にあたっては、国立民族学博物館所蔵のメオ族・ヤオ族・カレン族・アカ族・リス族の衣裳を活用させていただいた。

結 果 お よ び 考 察

I 山地民族の人々と生活域

タイ国は日本の1.4倍の面積を有するが、人口は約4,400万人と言われている。現在では、国内の広大な台地平原のほとんどが荒れたまま放置されており、そこには開拓の可能性が予想される。しかし、この広い国土もその人種構成は極めて複雑である。タイ国全人口の大半はシャム人とラオス人であり、中国系人がそれに続き、全人口の約13%がマレー、カンボジア、ベトナム、その他東南アジアの人々からなっている。この他に、ビルマやラオスとの国境にある山岳地帯にはメオ族、ヤオ族をはじめカレン族、リス族、ラフ族、ラワ族など約25万人にのぼる山地民族が住んでいる。これらの種族の多くは、最近までタイ政府の監督のおよばない人々であった。そして、この事はタイ国の国家体制を複雑なものとしている要因の一つでもある。

1. 種 族

山地民族の特色を把握するには、まずそれぞれの種族を明らかにする必要がある。それらの分け方についてはいくつかの意見が述べられている。例えば、言語による分け方もその一つ

の方法である。同じ種類であっても国によって呼び名が異なることもあり、またその民族自身が呼ぶ呼び名と他の民族が呼ぶ呼び名との間に違いのあることもある。従ってこれらを整理してみると同一の民族に属してしまうものもあって、言語による分け方についても研究者により若干の違いがみられる。現在、比較的多く活用されている、岩田(1971)、梅棹(1978)、石井(1979)、Young(1969)、和田(1970)らの言語分布による分け方によれば、メオ・ヤオ・アカ・リス・ラフ・カレン・ホー・ラワ・カムー・モン・クイ・ネグリート・シャン・チンの14民族がタイ国に住んでいる。そこで言語による分類を行ってみると、比較的多く用いられているなかでも、岩田(1971)の著書の中にあるKunstadter(1967)、和田(1970)、Young(1969)の分類と、三谷(1979)とLebar(1964)による分類では両者の間に若干の違いがみられる。例えば、中国雲南省方面から南下移動するのにベトナム、ラオスを経てタイ西北部に移動してきた民族をメオ・ヤオ語族と呼び、南下移動するのに北ビルマ方面を通して南下してきた民族をチベット・ビルマ語族としている和田(1970)の分類方法と、また南シナ方面と北ビルマ方面から南下してきた民族をまとめてシナ・チベット語族としている三谷(1970)の分け方では若干のくい違いがみられる。これは、民族の移動とそれに伴う周辺の異民族との関係からの影響をかなり多く受けてきた結果によるのではないかと想像できる。この点については、今後さらに検討の余地があるものと思われるが、現在の知識からはアウストロ・アジア語系の民族は比較的古い時代からこの地方に住んでおり、そこへシナ・チベット語系の民族が南下して来たことがうかがえる。

2. 生活域

タイ国に住む山地民族の多くは古いもので100年、新しいものでは60年～30年以前頃からこの国に移り住んでいるものと言われている。〔講談社編集部(1975)〕これらの多くの民族は森林を焼き払い、その跡に農耕地を作り、作物を生産して生活してきた。普通は5～10年を契機とし、永いので約30年で新しい肥沃な土地へ転々と移動している。この他にも、天然痘などの疫病の流行あるいは部落で何か大きな揉め事が起った場合は場所を移動する事がある。この様な理由により、移動の激しい種族(メオ族・ヤオ族)については定住地を明らかにする事が困難で、その生活域を正確に把握することはむずかしい。今回は彼らの生活域を解明することが主たる目的ではないので、ここでは比較的よく用いられている和田(1970)、岩田(1971)、梅棹(1978)、石井(1978)らの文献によることとし、その生活域を示すと図1の様になる。このうち比較的移動の少ないと言われている種族はカレン族である。彼らはビルマの国境沿いの山地から半島部に住み、焼畑農業をしているが中には焼畑耕作と水

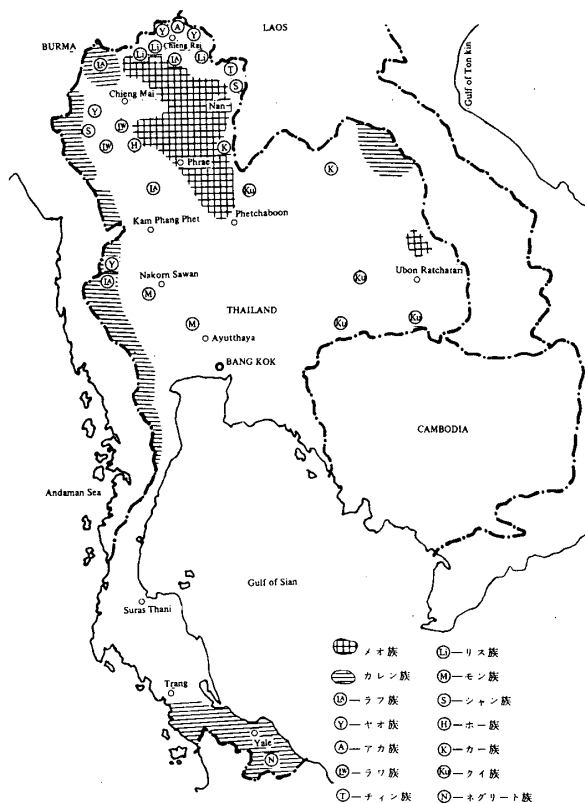


図1 タイ国における山地民族の生活域

田耕作の中間を示す山麓丘陵，高原の中間地帯の接合地域に広く生活するものもある。メオ族は一般に西北部一帯に，ラフ族はビルマ寄りのタイ西北部の山あいの奥地に住む。また，リス族はラフ族やアカ族よりさらに高地に住む場合が多いとされている。しかし，これらの種族は必ずしも同様な山地に住み，同様の生業形態を持っているとは限らない。

II 各民族の特徴

山地民族の特徴を明らかにする上に必要と思われる各民族と，その生活域は前述の通りであるが，彼らの多くは原始宗教を信じ，焼畑農業を営み，自然の動植物の採集や狩猟によって生計を立てている。また，衣裳は特に夏・冬の区別もなく，日常着・外出着・儀式用と言った区別も基本的にはない。この点は，各種族の共通した特徴であろう。しかし，中には儀式などの場合の衣裳は日常着と異なるものを用いる種族もいる。なお，女性の場合身につけるものすべてが全財産であることもあって，各種族により特別な特色を有するものが多い。次に代表的な種族の生活についてその特徴を述べる。

1. メオ族

メオ族はヤオ族と密接な親縁関係を持っており，中国の貴州省に原郷を持つと言われている。彼らの先祖は貴州を中心に華南，西南中国に生活し，Young (1969)によれば100年程前からベトナム，ラオス，タイなどの山岳地帯に移動してきた種族である。従って，ヤオ族ほどではないが中にはかなり漢字の読み書きのできるものもいる。また，正月には羽根つき，コマまわしをするほか，餅つきなども行い日本人と類似した習慣を持っている。この種族は内部で白メオ・青メオ・黒メオ・紅メオ・花メオの各族に分かれるが，この内タイ国に住むのは青メオと白メオのみである。それは外国人が付けた名称で主として衣裳の色の違いによる区分であり，本質的なものではない。

(1) 衣生活

タイのメオ族の場合，上述の様に衣裳の色により青メオ族・白メオ族とに区分され，それが彼らを見分けるには最も簡単な方法である。衣裳については，国立民族学博物館の資料およびYoung (1969)，白鳥(1978)等のもので解析すると次のとおりである。

a 青メオ族の衣裳

青メオ族の衣裳は老若・既婚・未婚の区別はあまりなく，布地は通常自家栽培の綿や麻から紡いだ糸を手織りで織り，藍で染めた布を用いる。図2に示すように男性は白メオ族より丈の長いジャケットに股上の深い朝鮮のパジの様なズボンをはく。その上から，刺繍のある帯を前に垂して締める。帽子は中国風の型で，頂上に丸く赤いボンボンがついている。なお，祭の時などは沢山の銀の装飾品をつける。また，女性は藍で染めた濃紺のセーラー衿の上衣を着る。なお，前の明きから衿の廻りに赤のトリミングをし，裏衿には柄のある布をキルティング風に刺してある。スカートはローケツ染めの細かいプリーツ・スカートををはく。

b 白メオ族の衣裳

男性は丈の短いバンドカラーのかぶり型のジャケットを着て，股上の深いパジの様なズボンをはく。色は濃紺の上下衣や，青の上衣に濃紺のズボンをはいたりする。男性でも銀製の首飾

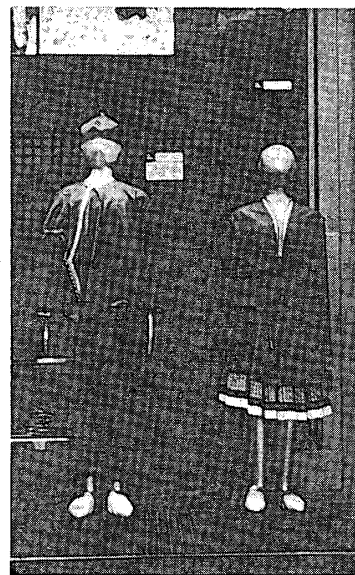


図2 青メオ族の衣裳

りをしている。女性はいつも青のパンツをはき、長い黒に青の縁どりのエプロンをつける。また、時には濃紺の上衣と裾に刺繍のある白のプリーツ・スカートをはくこともある。濃紺の上衣には刺繍のある帯を締め、後で結んで垂らす、銀製の首飾りをし、頭髪は前の部分を美しく剃り、布をターバンの様に巻き頭髪をかくす。祭の時には銀の装飾品を男女共につけ、周囲に房飾りの沢山ついた刺繍のあるターバンを巻く。

(2) 食生活

彼らは米食で、ジャガイモ等の野菜を作りこれを主食としている。また、独立心の強い民族で自給農業であり、その農耕とケシ栽培で生計をたてている。なお、この種族はヤオ族と同様に黄金の三角地帯と言われているケシ栽培の中心的存在として有名である。従って、アヘンを飲用するものもかなり多く、その中毒患者は高令者に多い。儀式にはトウモロコシの酒が飲まれ、また正月には豚や鶏がいけにえにされて、その肉は正月中家族の者で食べる。

(3) 住生活

彼らは小村集落の大家族生活を営み、一つの村が10世帯程度のものは多い方に入り、比較的小さな独立した村を作って生活する傾向がある。タイ国に住むメオ族は45,000人余りと言われ、青メオ族の方が白メオ族よりやや多い様である。

家屋は木造で、壁は板を並べただけの粗末なものであり、地面に直接建築し窓もないので薄暗い。平土間式で、中国人の家屋に似ている。室内は30畳位で比較的広い。また、穀物倉庫は、ネズミの侵入と湿気を防ぐため高床式となっている。

(4) 習俗

メオ族は中国的宗教習慣を持つ原始宗教信仰者であるが、Young（1969）によれば、わずかながらクリスチャンもいると言う。メオ族の原始宗教は礼拝において善悪の魂とその他の3つの魂の概念に限定した信念を持っている。即ち偉大な祖先の魂を崇敬することが重要なポイントの様である。3つの魂とは、死後身体から離脱して行くとの考えのもとに、1つは天国あるいは死者の居場所と称する所にいる魂であり、もう一つは墓場に残る魂、残りは再び形あるものとして現世に生まれかわる魂と信じられている。一般には埋葬以前に死者から悪い魂を追い払う祈禱をする儀式を行い、鶏や豚をいけにえとして供える。この種族はヤオ族と同様に犬が祖先であり、彼らはその子孫であると信じ犬を敬愛するのも特色の一つである。なお、メオ族は新年祭を行うについて、年のあらたまり、村のあらたまり、人間のあらたまりと共に靈魂を喜ばす神聖な行事として盛大に祝うという。

先に述べた様にいけにえを祖先の靈に奉げることにより、家族を守り、十分な食物を与えてくれる様にとの意味が含まれていると言う。奉げたいけにえは、新年祭の期間中、家族で食べる。また、衣服を新調し、羽根つきやコマまわしなどをして楽しく遊ぶのがメオ族の新年祭の習慣である。

2. ヤオ族

この種族もメオ族・リス族・アカ族などの祖先と同様、古くから知られた山地民族である。これらの種族は古くは中国揚子江南部一帯に住んでいたが、漢民族の南下に伴い南に移動し、ベトナム北部からラオスやタイに入り定着したものである。そのためか中国の風俗・習慣がかなり強く残っており、漢字の読み書きのできる者もかなり多い。また、一方漢民族とは異なったヤオ族特有の文化を形成している。なお、タイ国のヤオ族は西北部のナン地方およびチェンライの北方地域に多く住んでいる。

(1) 衣生活

山地民族の衣裳は種族によりそれぞれ特色のある装飾がほどこされている点についてはすでに述べた通りであるが、図3に示した様にヤオ族の男性の衣裳は女性に比べ簡素であり、装飾は少ないが打ち合いが変化のあるアンバランスになっておりネックラインの位置で止められている。ただ、唯一の装飾と言えは打ち合いに手の込んだ刺繍をしたポケットが付けられ、ネックラインから裾、袖口にかけてビーズ刺繍などがほどこされたトリミングのあるルーズなジャケットである。それに同色で濃紺の手織のルーズなズボンをはいている。また、彼らは頭に何もかぶらないのが普通であるが、時には布製の頭巾をかぶる事もある。これは成人より少年に多い。ズボンの形態は朝鮮のパチと同様である。なお、女性の場合には濃紺の上着の衿ぐりからウエストにかけて太く赤い毛糸の縁どりがなされており、ちょうどレイを首からかけた様な感じに仕立てられている。ウエストには幅広の濃紺のサッシュベルトを締め、下衣はルーズなガウチョ・パンツ風なズボンである。それは多色の糸を使った幾何学的模様のカロス・ステッチがなされており、ヤオ族の宇宙像を構成する太陽・月・星などの天体や動植物を抽象的に表現したものである。このカロス・ステッチはサッシュベルトの垂れた部分やターバンにもほどこされている。女性は子供の頃からこの伝統的手芸の修得に励み、正装時には銀の装飾をするのが正式であるとされ、ターバンの上からも装飾的に銀のブレードを巻く。また、花嫁は日常着と同型の衣服であるが、ヘッドドレスに極めて手の込んだ三角の天蓋（角帽）の大きな帽子をかぶる。これに対し花婿は頭に派手なターバンを巻き、パーホームと言う肩衣をかけるのみである。この様にヤオ族の衣裳は、男性と女性とは大きく異なっている。

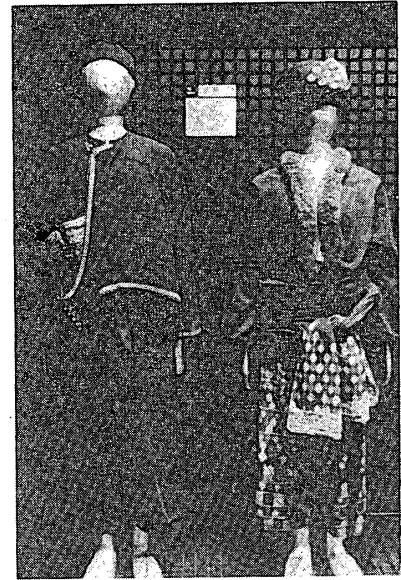


図3 ヤオ族の衣裳

(2) 食生活

彼らの食生活は、先に述べたメオ族とほとんど同じである。野菜を作り、儀礼用にはいけにえに豚や鶏を用いることも同じであるが、特に豚肉と豆腐をバナナの葉で包んで蒸し焼きにしたものが好物である。また、メオ族と共に黄金の三角地帯におけるアヘン供給者としての中心的存在である。このためタイ政府は山地民族が外部との接触を避けるよう、1958年にケシ栽培禁止令を出した。それ以後、彼らは貧しい生活を続けている様である。これに対しタイ政府も養蚕の奨励を行ってはいるが、ケシに代わる程生産性の高いものはなく、そのまま放置されている現状である。なお、彼らは接客に水パイプで吸うアヘンや木の皮をむいてとるグリーンティーを出してもてなす習慣がある。

(3) 住生活

ヤオ族は1つの村の平均家屋数が15戸位で、平均1戸に8.5人が住んでいる。タイ国におけるその人口は約20,000人と言われている。住居は中国人の家屋に似て平土間式で、木造である。穀物倉庫は高床式で、主に竹で造られている。

(4) 習俗

山地民族には原始宗教信仰者が多いが、ヤオ族も同様である。メオ族同様に彼らも祖先は犬

であると言う。ヤオ族には神話（種祖神は「槃瓠」と称する靈犬）があり、犬を崇める習慣がある。ヤオ族の宗教は基本的には精霊であるが、固有の土着宗教ならびに中国的な儀礼とも融合している面も多く認められる。彼らは家の中に守護神を祀り、祭壇が作られ、日常は線香がともされているが、ヤオ族の社会には社寺や偶像はない。しかし、最近ではクリスチャンも少しづつではあるがみられる様になった。また、鶏や豚のいけにえが病人や死人に供えられる。

入浴することの少ない山地民族の中にあつて、彼らは毎日風呂に入り衣類も始終洗濯し、清潔な生活をしている点、これも一つの特色と言えよう。

また、この種族の結婚式は女性の家でなされ、出席する人々は日常着と変わらない服装で出席し、受け付で招待状を示して入場する。式場にはタイ国王一家の写真が飾られる。なお、新郎・新婦は名前を漢字で書き柱に貼りつけたり、結納の目録なども作られる。結納品は、銀の延べ棒や銀の茶碗形にしたものや織物等である。結婚は男子は16才、女子は14才から認められているが、結婚には費用がかかるので若い男子には縁遠くなる傾向にある。このため婚前の交際はかなり自由に認められている様である。また、彼らの結婚はほとんどが同種族内で行われており、近隣にアカ族・ラフ族が住んでいても彼らとは信仰が違うために結婚はしない。しかし、買い子という習慣があつて、他の種族の子供を養子として育て、ヤオ族と結婚させることもあつて、実際には混血もなされている。

3. カレン族

カレン族はビルマ、タイ国の国境地帯からラオスの一部にかけて分布し、チベット・ビルマ語系の言葉を使用する。その原郷を東部チベット、四州、雲南地方に持ち、遊放民的文化要素を持って移動してきた種族と考えられる。しかし、彼らはモン・クメール族の影響を受けた形跡も認められる。即ちYoung（1969）によれば、モン族の影響はかなり顕著に表われ、ネグリート族との混血の影響もあると記されている。また、ラフ族の伝説によれば、ラフ族が南中国にいた頃ラフ族とカレン族は兄弟の関係であったとも伝えられている。また、タイ国に住んでいるカレン族のほとんどは、ビルマ東方を通過してタイ国に移って来たものが多いとされている。東南アジアにおけるカレン族の人口は約150,000人と言われ、言語によりスゴークレンとポーカレンとに分けられるが、タイ国に住むカレン族の70%はこの両カレン族で白カレン族とも呼ばれている。残りはカヤカレン族とタウンズカレン族で、一般に赤カレン族と呼ばれている。白カレン族は平地性で、赤カレン族は山地性のカレン族であり、言語・風俗の上でそれぞれの相違が認められる。この種族は通常山地と平地の中間地域に住み、そこで焼畑農業を営んでいる。しかし、近年タイ文化の影響を受けタイ化されてゆくものがあり、焼畑耕作に加えて水田耕作も取り入れられつつある。

(1) 衣生活

a 山地カレン

彼らの衣裳は外見的にもあまり清潔な感じではなく、汚れたものを身につけている。男性は手織りのジャケットにルーズなズボンが一般的な衣裳であるが、女性は白か黒の手織の布に小さな刺繍をほどこした巻きスカート風のもの、丈は膝丈位いの短いものをはく。また、上衣は用いないが細長い丈の布を片肩に掛け、それをウエストに巻き、その上に四角のケープ風布を掛け首の所で結ぶ。頭には無造作にターバンを巻き、足首には漆塗の竹の輪をつけ、上の方には子牛の皮や大きな熊の皮を巻くのが常である。イヤリングは好んで銀製の精巧な装飾をしたものをつける。また、機織りは女性の仕事で、綿から紡ぎ、自分で染色を行う。この方法はすでに2,000年位前から中国雲南省で使われていたもので、どこにも切れ目のない筒状の布に織ら

れる。これは、現在でも東南アジアの島々では少数民族の間において用いられている。

b 平地カレン

平地に住むカレン族には、スゴーカーレンとポーカレンがある。

・ スゴーカーレン

この種族の男性は、普段はタイ族によく似た衣裳を着ており（バンドカラーの上衣にズボン）、カレン族特有の民族服はあまり着ない。カレン族の衣裳の特徴は、丈の短い貫頭衣型の脇に飾り房の付いた派手な色や濃紺などの暗い色の上衣に、ルーズなズボンをはき、ターバンは色々な色彩のものをかぶっている。また、女性の衣裳は未婚者と既婚者によって違っている。未婚女性は図4左の様な手織の白い木綿で作られた貫頭衣型のくるぶし丈の衣裳を着用している。それは装飾があまりなく若干の刺繍がある程度である。頭には白の布かタオルを頭布風にかぶり、首には赤い木の実の太い首飾りをつける。また、既婚女性は図4中央（現地より得た資料）の様な濃紺あるいは赤など色のある貫頭衣型の上衣を着る。それは腰丈位いの長さで、裾には幅広く刺繍がほどこされている。頭には未婚女性と同様に頭布風に布をかぶっている。



図4 平地カレン族の衣裳
（現地絵ハガキより）

・ ポーカレン

この種族の男性は、スゴーカーレンとほとんど変わらないが、女性の場合に最も特色があり、注目されるのは未婚女性の衣裳である。それは丈の長い貫頭衣型であるが、刺繍があり、また房がついていてスゴーカーレンよりはるかに派手で目立っている。また、祭の時には手首や腕にブレスレットをはめ、銀の首飾りなどを飾り、ウエストにビーズを下げたりする。これに対し、既婚女性の衣裳はスゴーカーレンよりもやや着丈の長い所が異なる程度である。上衣は所々に派手な赤色でダイヤ型の刺繍がほどこされている。また、スカートは一般に暗い色のものをはく傾向がある。

(2) 食生活

彼らの食物は、米と野菜類が主であり、時にはこれにカレー粉を混ぜて食べると言う。蛋白質源としては魚肉、昆虫などがあるが、食べられるものは何でも食べる。カレン族は狩猟に優れており、亀やトカゲの肉も野生動物の中では美味とされている。また、男性の中には他の種族と同様にアヘン中毒者がおり、また一般に酒類もかなり多く飲むためアルコール中毒者もいると言う。

(3) 住生活

山地カレン族の生活は他のカレン族と大差はないが、少数グループで20戸位が集まって一つの村落を作って生活をしているものが多いが、一戸当たり平均6人位が同居している。住居を定める場合の用地の条件は、近くに川が流れており、なだらかな傾斜面が好まれる。斜面に杭を打ち小屋風に建てられ、床や壁は竹を用い、屋根は草葺きである。小屋は互いに隣接して建てられ、村落は一応は組織化され整ってはいるが、あまり衛生的ではない。

(4) 習 俗

彼らもほとんどが原始宗教信仰者であるが、中には仏教信仰者もかなりいると言われている。また、19世紀末、ビルマから宣教師が来てキリスト教を布教したためか、クリスチャンによる特別な社会が構成され約3,000人位の信仰者がいると言う。この種族の原始宗教は、自然のすべてのものの生命に魂が存在しているという信仰である。そのため葬式・結婚式にかかわる行事には必ず宗教的儀式が取り入れられている。

カレン族の結婚した後の住いは妻方居住型で、妻方の家族と一緒に住むのがしきたりで、決して男性方には住まない。一人息子の場合は、よくラワ族の娘と結婚させる事がある。それはラワ族の結婚は夫方居住型であるからで、地理的にも比較的近くに住むラワ族とは深いつながりを持っている。妻方居住型では、最初は妻の家で住み、しばらくすると同屋敷内やその近くに家を造り別々に住み、最後は末娘が両親と住むという形である。

4. アカ族

この種族はチベット・ビルマ語系で、ロロ族やラフ、リス族と類似した言語が用いられている。メオ族が成立した頃と同じ時代、即ち約4,000年の歴史を持つと伝えられている。古代ロロ族やノソ族の一派であり、南雲南地方から移動してきたものと考えられている。また、ラフ族やチベット人の影響もかなり強く受けている様子もみられ、タイ国アカ族はほとんどがビルマやラオスから入って来た者の様である。なお、タイ国でのこの種族は、メーサイ、メ・チャン、チェンライ地方の限られた所にしか住んでいないようである。

(1) 衣 生 活

彼らの衣裳の布地は、通常自家栽培の綿や麻から紡いだ糸を手織りで織り、藍で染めたものを用いる。

男性の日常着は図5に示すように、黒の手織りズボンに、ジャケットも黒に近い濃紺であり、前明きには大きなコインを並べて釦にするなど、面白いアイデアである。また、頭には黒のターバンを巻いている。なお、平素は裸でいる事もあるが、祭などには縁に刺繍をほどこしたのものや、銀の装飾のあるものなどを着用し、銀の首飾りを用いたりする。少年は多色を用いた布の帽子をかぶる事もあり、髪は短い弁髪である。

女性は装飾過剰と言われる様な、極めて目立つ特異な服装をする。図5に示す上衣には胸当てがつき、その胸当てと袖には多色を用いて縞模様の手芸的手法を用いたもので、東洋人に似た手先の器用さが伺える。また、衿ぐり、打ち合い、袖にはトリミングがほどこされており、スカート丈は超ミニでプリーツ・スカートであり、その上に前垂れをする。かぶり物は図6のように特徴があり、それは竹籠を

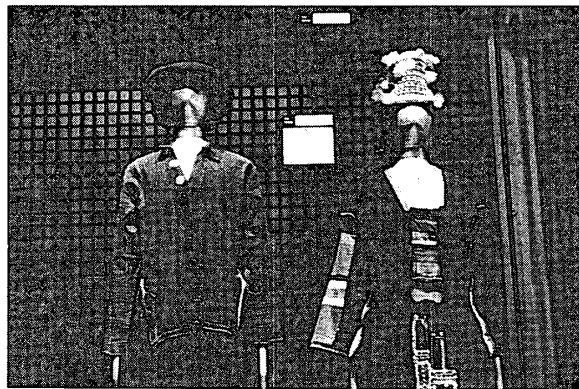


図5 アカ族の衣裳



図6 アカ族の女性帽子

逆にした様な型であり、銀貨・ビーズ・貝・木の実・赤く染めた鳥の羽根・サルの毛の束などを色どり鮮やかに帽子全体を飾り、満艦飾とでも表現すべき物である。さらに、礼装用になると犬のしっぽを付けたりし、あごの下で紐をしばって固定させる。このかぶり物は本来は既婚女性であることを示すものであったが、今日では未婚女性も用いる様になった。仕事をする時もカバーをかけてかぶり物をつけたままである。髪のはきは中央で左右に分け、耳の所で引き上げ、かぶり物の中に入れてある。なお、睡眠中や病の床にあっても既婚者は、かぶり物をとらない習慣がある。それは宗教的理由によるとされている。また着飾った時には、沢山のビーズや重量のある銀の首飾りをするのが特徴である。

(2) 食生活

アカ族はヤオ族やメオ族と違い犬の肉が好物で、よく食膳に出される。中でも黒犬の肉は特に美味とされている。儀式には豚がいけにえに供えられるが、供えた肉は食べない事になっており、この点は他の種族と異なる。

この種族は老若、男女を問わずBetel Nutsと言う果実を常に噛む習慣があり、欧米人のガムに最適するものである。また酒は機会があるごとによく飲み、トウモロコシでウイスキーを醸造する。これを入れる容器には、ひょうたんの実がよく用いられている。また、タバコは、男女ともによく吸う。

(3) 住生活

アカ族は独立した山地生活者で、高地に村を作り、平地との接触は少ない。この種族は1部落100戸～200戸からなり、1戸当りおよそ7～8人が住んでおり、かなり大きな村落を作る傾向にある。この様なアカ族以上の規模の村をつくるものは、平地に住むシャン族以外にはないと言われている。また、彼らは他の種族と同様に焼畑農耕民で、5～10年位で村をあげて移動する。村をつくる場合には、家は尾根に沿って左右に分かれ、二列に並んで建てられる。従って山の背が、村内の道路として役立つようになっている。家は片高床式で一般には竹で造られ、壁は葉で作られている。しかし、村長の家は木造である。

(4) 習俗

アカ族は、「死人の魂」を非常に重要であると考え、厳格な原始宗教の信仰者であり、アカ族の村の入り口は通常東の方向に一ヶ所のみつくりされている。これは彼らの村へ悪病が入って来ない様にという事で、道は途中から極端に狭くなり、入口には村人を悪魔から守るため「パハマ」と称する対の男女の人形や、死んだ犬が門の頂上から吊り下げられ、悪霊を撃退するため腐敗するまで放置しておいたり、あるいは様々な魔除けが入口に作られる。結婚式や葬式などの催しや病人が出た時には、鶏や豚のいけにえや水が供えられる。また、人が死にかけている時には、空中に向けて銃を発砲する事により悪霊を遠くへ払いのける事ができると信じている。この他、アカ族は水の魂を非常に恐れ、入浴することは水の悪霊が体の中に入ると信じている。従って、入浴するのは年に2～3回くらいであるから、体からは常に悪臭を放っている。彼らは手や顔の汚れを洗い落とすよりは、むしろ拭き取った方が良いと考えている。

結婚は夫方居住型をとり、結婚すると女性は夫の家に住み、2～3年両親と共に生活しその後は別居する。シャン族の男性がアカ族の娘と結婚することもあるが、その場合は夫がアカ族の住む山地に移り、平地に下って住むことはない。アカ族の女性はよく働く。非常に忙しい刈り入れ時でも、男性は竹細工や木工などで悪魔払いの矢を作るなどしてのんびりしており、女性とは対象的である。また子供たちは、女性と一緒によく労働する。従って、女性は働き手として迎えられるため、一夫多妻がこの社会では認められている。また葬儀の場合、死体は村か

ら西へ運び去られ、墓には築き山が作られ、イバラが覆いかぶされる他、豚のいけにえが供えられるといった奇習がある。

5: リス族

タイ国にいるリス族は、ロロ族・ノス族の血統を持つチベット・ビルマ語系の種族である。彼らはチェンマイからチェンライ地方に多く住み、タイ人は彼らのことをリソー族と呼んでいる。また、彼らの言語や習俗は、ラフ族と似た所がある。生活についての特色は、次の通りである。

(1) 衣生活

この種族の男性は図7左の様に、黒のダブルの打ち合いで丈の短いジャケットに、青のルーズなズボンをはき、白のターバンを巻く。ジャケットには、衿ぐりから肩にかけて一杯に、また打ち合いかけて銀の鉾が装飾的に付けられている。また赤や白など多色の紐を束ねた長い房を腰から前面に垂らし、現代の衣裳にも通ずるなかなかファッションブルなものである。これを他の種族の男性の衣裳に比べれば、より民族服的であり、装飾的である。また女性の衣裳の布地は本来、手織りの綿や麻を用いていたが、最近では市販の布地を使う事もある様である。上衣は変化のあるダブルの打ち合いで、衿ぐりから肩・袖にかけて色彩豊かな虹の様な横縞柄となっており、ワンピース丈の上着を着る。それは裾の方は、巻きスカート風に細身のシルエットである。下衣はルーズなズボンをはき、その上にサッシュベルト風に布を巻き、足には脚絆をつけ、頭には黒の大きなターバンを巻く。



図7 リス族の衣裳

(2) 食生活

彼らも他の種族と同様米食である。野菜を栽培し、トウモロコシやジャガイモを作って食用にする。このうちトウモロコシは家畜の飼料や酒の原料として用いられる。リス族のジャガイモ作りは有名で、平地民との主要な交易品とされている。またメオ族やヤオ族同様、リス族もケン栽培を行う。

(3) 住生活

この種族は一部落120戸近くの集団であり、山地民族の中では大きい方である。一般にラフ族やアカ族より高地に村をつくり、焼畑農業を営み、数年ごとに移動している。タイ国に存在するリス族の村は40村ぐらいと言われ、その占める割合は高い。また、家屋は通常高床式である。

(4) 習俗

彼らの信仰も原始宗教であり、一つの確固たる型を持っていて、祖先に礼拝をして祈禱をする。彼らは、世界中が善悪の魂であると信じている。また、リス族にとって中国暦の新年は大切な行事の一つであり、新年は6日ばかり祝われ、その間にトウモロコシの酒を飲んだり、踊りをしたりして楽しく過ごす。新年の行事としては、死んだ祖先の霊に豚のいけにえをささげる儀式を重要なものとしている。この儀式は、村の中央にある霊場で行われる。この他結婚式

の時などにも、同様にいけにえをささげる。また、リス族の女性は高地民族の中でも美人とされており、均整のとれた体格をしている。リス族の習慣としては、堂々とした態度をとる事が民族的誇りとしており、一般に姿勢が良い人が目立つ。

Ⅲ 民族衣裳についての比較考察

タイ国における山地民族を視覚的に区別するのに最も容易な方法は、白鳥(1978)も述べている様に衣裳と髪型である。従って、私たちもそこに中心をおいて考察を進めた。即ち、これらの種族は、それぞれ独自の伝統的文化遺産として永い間培われてきた衣裳を身につけており、その衣裳にほどこされている意匠・模様は各種族ごとに特色を持ち興味深い。これらは、各種族の精霊信仰と深いつながりを持って生まれたものであろう。それぞれの種族は特有の衣裳を着ているが、また一方において次に上げる様な共通した面もみられる。

(1) どの種族も材質の違いはあっても、自らの手で織り、且つ染めたものを用いている。

(2) 特殊な場合を除いては彼らの衣服には日常着・仕事着・晴れ着の区別が特になく、いつも丹精込めて作った衣裳をまとっている。

(3) 男性は女性に比べ、一般に日常は民族服を用いず、儀式・祭などの時のみ着用する傾向がある。

(4) 彼らの生活、特に野外作業での必要から生まれたのであろう脚絆を、どの種族も着用する。

しかし、基本的に各種族独特の衣裳を着用しているので、これについて検討してみる。

メオ族の場合、女性のスカートに他の種族と異なる特色がみられる。それは藍で染めた生地には白のローケツ染の細かいプリーツ・スカートで、その上にクロス・ステッチの刺繡、パッチワークがほどこされている。上衣はセーラーの様な衿がつき、それにキルトされたブラウスを着る。これに対し男性は、打ち合いに変化のある上衣に、朝鮮のパチの様なズボンをはき、支那式の帽子をかぶる。男女共、銀製のブレスレットをつけており、これは装飾と同時に財産でもある。女性の場合近隣のアカ族に似たプリーツ・スカートがあるのみで、ローケツ染めは他の種族にはなくこの種族特有のものである。

ヤオ族の場合、真赤な毛糸のストール風の衿に特色がみられ、下衣はガウチョ・パンツ風で、それには精霊信仰から生まれたと考えられる動植物を抽象的に表現したクロス・ステッチがほどこされている。一方男性の衣裳はメオ族とほとんど基本的な型は変わりなく、女性のみ特有の衣裳があり、中でも衿が目される。

次にカレン族の場合、この種族は平地性のものと山地性の両者があるが、前者の女性は長方形の布を肩に掛け、それをウエストに巻き、その上から四角の布をケープ風に掛けるのが特徴である。これは平地性のものに比べ、その違いの主たるものである。平地カレンは男女共貫頭衣型を着るが、女性の場合未婚者と既婚者とは貫頭衣型ではあるが異なる。未婚者は、白に赤のダイヤ形の刺繡をほどこした踝丈のワンピース形式である。これに対し既婚女性は、色のついた上衣と下衣の二部式のものであり、スカートは巻きスカート風である。この種族の民族衣裳は、メオ族やヤオ族に比べ装飾が少なく変化に乏しいのが特色である。

アカ族では、男性と女性とで顕著な違いがみられる。即ち、日常の男性は黒のジャケットにズボンをはきターバンを巻くが、特別の場合には縁に手の込んだ刺繡のあるものを着、銀のネックレス等をする。この種族の女性は、タイ国に住む山地民族の中では装飾過剰と言われるほど鮮やかな装いをしている。即ち身頃にはパッチのカラフルな布を刺したブラウスにプリーツの

ミニスカートを着用する。また帽子は他の種族には見られない華麗なもので、それは竹籠を逆にした様な大きな厚手の布の帽子で、それに銀貨・ビーズ・貝・木の実・あるいは赤い鳥の羽根やサル毛の束がつけられている。そして礼装用となると、これに犬のしっぽなどを付ける。犬は悪霊を撃退させるために用いると言う。彼女らは前述の様に、睡眠中や病床でも帽子をはずさない。

リス族の場合は、男女共袖付けがドルマン風で、ゆったりした袖付け廻りである。このうち、男性の上衣は艶のある黒の生地で作られ、衿ぐりから肩にかけて銀の鍔が止められており、ズボンはルーズなものをはくのが通常である。これに対し女性は、カラフルなパッチ式にコードの刺繍がほどこされており、丈長の上衣にルーズなズボンをはき、脚絆をつける。特に袖のあたりに、他の種族にない特色がみられる。

以上、各種族の民族衣裳について比較考察したが、これらの種族もタイ政府の政策により、平地民との交流、ケン栽培の禁止などから彼らの生活の中にも徐々に変動がみられる。白鳥(1978)によれば、従来の焼畑耕作から彼らは平地民に労働を提供し、それにより生活を営むとか、信仰の形態や宗教儀礼の変化により、彼らの社会構造も変動し、伝統的文化も変化しようとしている。またカノミ(1980)も、山地民族特有の自ら栽培し、自ら織り、そして染めるといった自給自足の衣生活から、イミテーションや安い化繊製品およびプラスチック製品の利用に変わってゆくのは時間の問題であると述べている。従って今日の現状を記録し、後世にこれを残してゆく事は意義のあるものと考えられる。

摘 要

1. インドシナ半島のうちでタイ国は、永く他の民族の支配を受ける事なく、独立国家としての立場を守ってきた唯一の国であり、日本とも古くから深い関係を持ってきた。また、この国は複合国家としても広く知られているが、その中でチェンマイ、チェンライなどを中心とする西北部山地に住む諸民族は、独自の生活習慣を持ち、特有の民族服を身につけている。これについて私たちは、文献と国立民族学博物館および名古屋女子大学生生活科学研究所の資料をもとに研究を行った。

2. 上記の資料によると、現在タイ国にはメオ族・ヤオ族をはじめ約14の山地民族が住んでおり、これらは主として西北部の山地に分布している。

3. 彼らの生活の特色を解析すると、次の様な諸点が上げられる。

(1) 各種族のほとんどが原始宗教を信仰しており、精霊に豚や鶏のいけにえを供える習慣がある。

(2) 一部の種族(メオ族・ヤオ族)には、漢字の読み書きができる者がいるが、多くは文字を使用しない。

(3) 彼らの多くは、焼畑農耕を営み、綿を栽培し、自ら機を織り、染色をするなど自給自足の生活を行っている。また、規模の大小はあるがたいはケンの栽培を行い収入の道を計っている。

(4) 衣裳は特別の場合を除き、日常着・仕事着・晴れ着などの区別はなく、常に同じものを着用している。

(5) ある種族(メオ族・ヤオ族)は、犬を彼らの祖先として崇める習慣があるが、他の種族(アカ族)では、これを好物として食用にするものもある。

4. 各種族の最も顕著な特色は、民族衣裳である。それは各種族ごとに特有の染め、織り、

デザイン、アクセサリをしており、他の種族と一見して容易に区別ができる。服装は男性の場合さほど目立たないが、女性において特に目立つ。

5. これら山地民族の生活や衣裳も、時代の変遷に伴い少しずつ変化が現われてきている。即ち平地民との交流により、彼らの生活にも永年母から子へと根気よく歳月をかけて伝承されてきたものも、金ですぐ買える安易なものに変わり、また便利さと引き換えに伝統の技術が失われていく可能性もそう遠くはないのではなかろうか。

今後さらに現地調査を行い、その実態を明らかにしたいと思うが、現時点においてこれらの記録を残しておくことは有意義なことと思われる。

最後に本研究に当り、その機会を与えて下さった名古屋女子大学生生活科学研究所長広正義博士、また終始懇切な御指導を賜った岐阜大学教授中野刀子先生に深く感謝の意を表すると共に、親切な御助言を賜った名古屋女子大学教授柄原きみえ先生、資料を提供下さり懇切な御助言を頂いた名古屋女子大学教授佐藤正孝、平野年秋の両先生、および国立民族学博物館助教授大丸弘先生に対し厚く御礼申し上げる次第である。なおこの研究は、本大学生生活科学研究所の助成によって行ったものである。

文 献

- 1) 岩田慶治：東南アジアの少数民族，日本放送出版協会（1971）
- 2) 梅棹忠夫：民族探検の旅第2集，学習研究社（1978）
- 3) 石井米雄：世界の民族11，平凡社（1979）
- 4) 岩田慶治：民族地理(下)，60～61，朝倉書店（1969）
- 5) 白鳥芳郎：季刊民族学4，97～103，（1978）
- 6) 白鳥芳郎：東南アジア山地民族誌，講談社（1978）
- 7) 講談社編集部：世界の国・東南アジアI，講談社（1975）
- 8) 菊地一夫：ケンをつくる人々，三省堂（1979）
- 9) 飯島 茂：カレン族の社会・文化変容，創文社（1971）
- 10) G. Young：The Hill Tribes of Northern Thailand，（1969）
- 11) エッソ・スタンダード石油(株) 広報室編：Enrgy，26～27，（1970）
- 12) 村松一弥：中国の少数民族，毎日新聞社（1973）
- 13) 綾部恒雄：タイ族，弘文堂（1971）
- 14) 岩田慶治：東南アジアのこころ，アジア経済研究所（1980）
- 15) 今川瑛一：メコンとイラワジの間，アジア経済研究所（1967）
- 16) 渡辺光編：世界の地理3 東南アジア，朝倉書店（1980）
- 17) 木内信蔵監修：目でみる世界の国164 東南アジア，66～91，TBS ブルタニカ（1980）
- 18) 松本敏子：世界の民族服，161～175，関西衣生活研究社（1979）
- 19) 竹村卓二：国立民族学博物館研究報告3巻4号，621～679，（1978）
- 20) カノミタカコ：染織と生活，25，106～110，（1980）
- 21) カノミタカコ：染織と生活，26，109～112，（1980）
- 22) カノミタカコ：染織と生活，28，104～108，（1980）
- 23) カノミタカコ：染織と生活，30，90～93，（1980）
- 24) 内田るり子：季刊民族学12，92～97，（1980）
- 25) 竹村卓二：月刊みんぱく3月号，12～13，（1979）